

天文元年服部元広伝書

底本……法政大学鴻山文庫蔵

〔上卷〕

〔巻頭には書名も巻序もなく、末尾の貼紙に「上巻終」とある〕

夫、能を一日に七番と定る事、其初長谷の観世音の御相傳にてことおこりければ、七観音の御尊形をかたどり、七星を表る口傳あり。神事・法事・諸祝言には番組七番たるべし。

△番組之次第

一 一 〰 一番にハ神能の祝言、二 〰 二番ハ修羅、三 〰 三番ハ藤能^(鬘)、四 〰 四番ハ鬼神、五 〰 五番ハ仁儀、六 〰 六番ハ業苦の能、七 〰 七番ハ又祝言すべし。

一 〰 まづ、神能を祝言の頂上と号る事ハ、それ我朝ハ神國として、君をあげ民をなで、海内の吉凶、神の玄鑒にかからずとゆふ事なし。故に神をうやまひ冥利を仰て、國家安全の祈祷のために神能をする事也。二 〰 二番ハ、釵をもつて國をしづめ、智略をもつて世をおさむる本朝のおきてなれば、修羅能又かんじん也。三 〰 三番ハ、世もしづまりて、色にそみ香にめでて、人の心もなさけふかく、貧をすくひ咎をゆるして、物のあはれミかなしミを知事、尤人の人たるゆへに、ゆうらくの舞をまふ藤能、本にてあり。四 〰 四番ハ、天ハおごりをにくミ、満るをかく冥顯なれば、はやく悪鬼をあらハして、のがれがたきは迷途の使、ミなことぐく、高も賤きも六道・四州にさ

まよふ身ぞと、しめさむために鬼能也。〱五番ハ、かくある世の中なれば、七珍万宝を手なぐさ
ミにし、綾羅錦繡をしとねにして富貴榮耀にほこる人も、五常のおきてをしらずして、藝もなく
能もなきハ、野鳥山猿にひとしきぞとしらせんために、仁義の能也。〱六番ハ、所謂ごとく、道
をきハめ法をただし人界をおもふ聖人・賢人の人をはじめ、おくふかくやむごとなき身にも、心
にまかせぬは人の煩、あらぬおもひ、あらぬ病苦のあく念にひかれまよひて、うつゝなき身と成
もあり、或ハまつごの一心によりて、佛となり、神となり、天人となり、龍神となり、天狗とな
り、蛇身となり、鬼神となり、餓鬼となり、人のゆくえはしれぬぞと、しめさんための能をする。
〱七番ハ其日のきたう、一座の是祝儀なれば、君を祝、國を祝、郡を祝、里を祝、町を祝、家を
いハひ、民を祝、身を祝て、又日出度神能にておさむ。かやうの道理有を以て、能ハ一旦の見物
にあらず、諸道のこれせつばうにて、ミな人のいましめ也。

一〱氣を轉る習あり。たとへば、〱翁式三番三の神妙なるふうていのあとにて、〱脇能の、うきや
かにはなく敷、物大きに氣を轉る事成がたし。又其あとに、引かへて、兵具をたいし武をふく
ミて、立居かしこくつよミをまふ〱修羅心に轉じがたし。扱其あとに〱幽玄なれば、物やさしく
じんじやうに、ミずくと舞しまふ事、一大事のわざ也。必前の修羅心ありて、きさき・官女の
兵法つかふ例なきすがたになる物也。又其あとにて、うつくしくよはくとしたる心をはらりと

轉じて、おそろしきゝ鬼能の、鐵石などをつきすへたるごとくなる、つよミがちに物おもくして、岩に花さき、枯木の雪におるゝやうに、すねくゝと心を轉じ舞なす事、成がたし。又其あとに、ゝ男能などの、仁儀礼智信をもつぱらとし、周公・孔子のミちをたゞす、能の心に轉じがたし。又其あとに、或ハゝ狂女などの、つまにはなれ子にわかれて、あらぬおもひに心ミだれ、おもハぬ旅にまよひつかれて、うつゝなくくるふかと見れば、折てつぎたるごとくに、又本眞の心もあるやうにけしきを轉る事、成がたし。或ハゝ山がつゝれう・すなどりの老人となり、渡世に身をやつし、或ハゝよしある姥となり、むかしをこふるとし暮て、わぐミたる躰に氣を轉じ、或ハゝ天人のたえなるすがた、或ハゝ龍神の萬項の浪によこたハれるかたち、或ハゝ佛菩薩の善心と成て妙躰殊勝のすがたとなり、或ハ我慢邪道のゝ天狗となり、或ハ悪念妄相のゝ蛇身と成かハリ、それぐゝのふうせい心を察して氣を轉じまねる事、成がたき物也。かやうのむつかしき習といへ共、只一ツの傳受を以て其しなぐゝに見ゆる事、我家の是秘事也。

△十躰之條々

一ゝ祝言之心 相生・弓八幡・難波梅

此類の能ハ、國をおさめ、君をまもり、夫婦の契りふかき故に、祝言の最上とす。謡をもかるぐゝとうきやかにうたひ、しかたをも、物おもく、ゆふくゝと、大きくさハやかに舞べし。ゝ安詮之

曲と名付。其心を引歌、

君が代はちよにや千代をさゞれ石の／岩ほと成てこけのむすまで

一 幽玄之心 江口・小塩・吉野静

此類の能ハ、色にそミ、香にめで、花やかにさゝめきたる風躰也。 春の夜の明るにたとへ、
謡をもミずくとうつくしく謡、ふしに色ありて、うきやかにはやす物也。 聲花之曲と名付て、
其心を引歌に、

花さかばなをいかならんよし野山／かすめる空の春のあけほの

一 戀暮^(慕)之心 嫩女^(班)・千壽・楊貴妃

此類の能ハ、思ひくづほれてしほれる根本なれば、物あぢきなくうちしめりたる風躰也。 謡も其
心得有て、息つよき音聲をきらふ。 萎る曲と名付。 引歌に、

ながれてはいもせの山の中におつる／よし野の川のよしや世の中

一 哀傷之心 角田川・野の宮・大原御幸

此類の能ハ、生をはなれ、亡魂ゆめまぼろしの世の中と思ひ入て、さびしく物がなしきを本意と
す。 秋の日の暮にたとへ、謡もあぢきなきふし計にて、なめらか成音聲をきらふ。 秋思の曲
と名付。

いつもふく軒ばの姿の風なれど／わきて身にしむ秋の夕暮

一 神祇之心 蟻通・龍田・賀茂

此類の能ハ、神前に及て心信感なるふう躰也。物ふかくけだかく神妙にして、謡をもきれひにうたひ、祝言の調子に無常のふしをそゆる。 〱馥曲と名付。

春の野にわかなつみつゝ万代を／いハふこゝろは神ぞしるらん

一 釈教之心 邯鄲・當麻・誓願寺

此類の能ハ、佛所をのぞみて得道し、成佛本望をとげたる根本なれば、つくろふ事なく、したるき事なく、さら／＼と舞しまふべし。謡も猶其心得して、ふしによせひ有事をきらふなり。 〱心の曲と名付く。

奥山にひとり浮世ハさとりにき／つねなきいろを風にながめて

一 無常之心 盛久・ 〱博風・春栄

此類の能ハ、うれひを思ひつめたるすがた・ことば、心すミたる風躰も有べし。脇にあひても其文句・ことばによく／＼心をかけ、其しな有事也。謡も 〱無常音と名付。

あけぬれば暮る物とハしりながら／なをうらめしきあさぼらけ哉

一 述懐之心 〱鉢之木・ 〱蘆荊・ 〱木賊

此類の能ハ、おとろひはて、野人となれる根本なれば、真のいやしきにはあらず。よし有心もちかんよう也。さて人の上のうわさにてもなく、ゆうれいにもなし。我身の上の現在の能なれば、謡をも常のことばにうたひ、ふし過たる事をきらふ。〱埋曲と名付く。

いそがれぬ年の暮こそあはれなれ／むかしはよそに聞し春かは

或ハ〱項羽・〱融・〱忠則・〱敦盛・〱通盛・〱兼平・〱玉藤^(稿)・〱浮船、いづれも此類の能の前ハ、よの常の船人・山がつ・塩くミ・草かりにてはなし。よしある人なれば習ある事也。

一〱田夫野人之心 〱鶉飼・安漕・〱善知鳥

此類の能ハ、いやしく浅ましき、本意なり。とせいを過しかねて、ひまなくつかれたる土民なれば、手つき・あしつき・身しほまでも、物さびしくすねくとして、うちくたびれたるふうていにて、つくるひなきをよきとす。聲・ことば・装束までも、いやしくふるびたるを用ゆ。

世の中をわたりくらべて今ぞしる／あはのなるとはなミ風もなし

但其本意なればとて、あまりにいやしき仕舞ハすべからず。至りていやしき儀は、貴人しろしめさぬ故に、仕手の心中もすいりやうにきたなし。

一〱五常之心 〱土車・放家僧・〱七騎落

此類の能ハ、五常の内にも又心ある事也。君をうやまひ、佛をたつとミ、神を仰はよの常也。親

の命にかはり、他人のことばをちがへじと仁儀を表とする事ハ、誠にせつなる心ざし也。此位を引歌に、

もろともに苔の下には朽もせで／のこりとゞまる名こそをしけれ

ひた面の能ハ、ゆうれいにも現在と定也。然間、よろづしかた・謡までも人に似たる事をきらふ。五常の根本、〱仁は慈なり。〱儀は和也。〱礼は順也。〱智ハ賢也。〱信ハ實也。此道理をわきまへ、よくたんれんをすべし。其外太夫と脇と心もち、能によりてかハる也。たとへば〱千壽ハ脇ハ幽玄、重衝は無常、太夫ハ戀暮、〱藤渡ハ脇ハ祝言、太夫ハ述懷也。よろづ是を以て知べし。物の習の理をつむる事、かくのごとし。

△物狂ひにあまたの心あり。

一〱わかれをしたふ物ぐるひ、嫩女・蟬丸・〱名越祓。

一〱我とくるふ物狂、百万・桜川・柏崎・丹後物狂。

一〱すがた計にてはかりごとにくるふ物狂ひ、〱三井寺・〱土車・〱花笠・〱籠太鼓。

一〱物のけにてくるふ物狂、浮船・二人静・哥占・庭鳥。

一〱執心の物狂、袞風・〱卒都婆小町。

右之内に、或ハ〱王子〱宮女〱侍女〱遊女〱武家〱土民のある事なれば、其根本をよく知おさめ

て、それ〴〵のかハりを分別すべし。一色に心を定ては、大きな相違あり。心ねのおもふにか
ハリふかき事、おほき物也。扱又其ミち〴〵のわざによつて、ゑしれぬならひ有事なれば、了簡
しがたき文句あらば、それ〴〵の人に尋て其ゆへをとふべし。「獵人得^二豹蹄^一、漁父知^二鱗網^一」
〔訓点は底本による〕とて、いやしきれうし・あま人といへ共、いとなむわざの道の事はよく知
物也。「子入^二大廟^一毎事問」とあれば、さらに恥辱にて有べからず。

△心を移す秘傳

一〴〵心をうつすとて、秘事にする事あり。前につぶさに書あらハすごとく、初の能の心をすて、後
の能の心もちに氣を轉じかゆる事、必成がたき物也。是ハまづ、樂屋にて、それ〴〵の相應の装
束をよくきなして、扱面をとりて、其面のかほつきをつく〴〵と見入^(ママ)入て、我心をしミ〴〵と其
かほの心になして、扱面をかけて出る時に、鏡に向ひ、ゑもん・かほつきをいよくよく見入
て、あのかほの我身ぞと、ふかくおもひ入る事也。此おもむきは、能者たるもの、聞てはたれも
かく有べき事と思ふ儀にてあるなれ共、〴〵心をうつす大事とて、秘傳に別してをしゆるにより、
爰ぞ彼秘密の所也とおもふに付て、はたと前の能の心あひうちうせて、後の能心さまに成かハる
也。たとへば〴〵真言の〴〵護身法〴〵九字などをきれば、いか成功徳ある事共理はさらにわきまへね
共、印をむすび文をとなゆるやいなやに、其ま、心清浄になりかハる。是も秘密のゆるしをうけ

て、一大事ぞと思ふ故也。爰を以て、諸藝ともに習をうけたる者ハ、其心になふ事をしあつるといへ共、しんじつの理たしかならず。習をよく傳受せし藝は、ちと其身ぶきようにてても、かんの所の所たしか也。可_レ秘_{々々}。

一_レ面をかける類の能ハ、心をうつすたよりもあり。面をかけざるおとこ能ハ、一大事の似せ物也。貴賤上下に目の前に手本のある事なれば、尤是むつかしき儀也。まづ顔くせなく、身くせなく、あしたかからず、扇などもかた手にてひらくべからず。よろづ略の儀をきらふ。略は不礼也。

不儀不礼なる事ハいづれの能にもいましむるといへ共、現在ハ猶以てきらふ。禮記にも、種々むりやうの礼をしるしおきて、万人のかゞみにせり。能ハもとより衆人のいましめ也。「教訓_{シテ}正_レスルモ俗_ヲ、非_レザレバ礼_ニ不_レ備_ヘ」〔訓点は底本による〕といへり。凡、俯仰之礼とて、顔のあをのくも不礼、又うつぶき過るも不礼なれば、只よきほどの位と知べし。悉くハしるしがたし。是にて萬事可_レ察也。

一_レゑもん身をつくろふ事、一ツの仕舞也。むさとハつくろふべからず。かつふハ慮外也。然共、下手のうへにてハ、すましたる躰成がたきゆへに、ほされて手のおき所なし。よくたしなむべき者也。ゑもんの仕舞と云ハ、たとへば_レ源氏供養に、「はづかしながらさりとは」と、長けんの右の袖をつくろひ、其かへるさに脇を見て、「仰をばいかでそむくべき」と云。是ハ舞所望

の事なれば、身をつくるふ事本意也。又々千壽に、「ミすのおひ風にほひくる」と、内の躰をうかゞひて、忽もん身づくろひて、「花の都人に、はづかしながら見ミへん」と出てとゞする事也。此理を以て、外はたんれんすべし。

一々面をせハしくきるべからず。一ツきりて見すゆるハよし。或ハハ百万に「むらがらす」、ハゆやに「桜花ちるをおしまぬ人やある」と、面をつかひ、きりたるハよろし。ちらぬ花・すむ月などハ、うごかずハりたる物なれば、うろくくと面きる事、あしし。或ハハ軒端梅などに、「池水にうつる月影」と謡、或ハハ芭蕉に「恥かしや帰るさの、道さやかにもてる月」などとうたふやうなる文句の月ハ、先影の月を見て、空なる月ハ見ずともほめたるは、せハしくもなく誠に面白し。古文真宝にも「人影有^レ池^地ニ、仰^テ見^ニルト明月^ヲ」〔訓点は底本による〕^{々々}。又藤原清輔歌にも、冬がれの森のくち葉の霜の上に／おちたる月の影のさやけさ

とよまれたる心もあり。又々融などに「まゆずミの色に三ヶ月の、影を船にもたとへたり」と謡、ハ田村に「桜の木間にもる月の、雪もふる夜あらし」と謡ハ、空の月を一目見て、下のけいをほめたるもよし。又々鶉飼に「思ひ出たり、月に成ぬるかなしさよ」と謡、ハ梅香枝に「月もなかばなり、ハ夜半樂をかなでん」など、云やうなる月の類は、空の月ばかりを見る。或ハハ鶉に「ねはんにひかれて、真女の月の、夜じほにうかみつ、」と謡、ハ軒端梅に「なを此寺にすむ月」

と云ハ、心の月なれば、見るべき道理なし。或ハ^ハ紅葉狩にハ「月待ほどのうたたね」といへ共、是ハすこしの間ぞといハんため也。^ハ三井寺にハ「よし花ももミぢも月も雪もふるさと」、いへ共、花ももミぢも月もともに、いづれも見ると道理なし。春も秋も冬もかハラズ、常の我やどにおや子すミなば、いなかとでもすミよかるべしと思ひたる所也。惣じて、月のミにかぎるべからず。よろづかやうに、心入文句によりかハるなれば、心えのため書記ものなり。よくく儀理に心を付べし。

一^ハあて仕舞とて、能ごとに心えべき習あり。一句一文の道理をさしあて、それあれ是と、扇をさし、ゆびにてさす事ハ、^ハあてしまひにてなし。指南とて、じねんの道理は、常に人のくせとして、一歳二歳のちゑなき子も、こつせんとゆびをさし、顔をむけるならひなれば、^ハあて仕舞とハ云がたし。只思ひ入のふかきとあさきとの舞やうの心もち也。たとへば^ハ松風に「月の夜かげに見奉れば世をすて人」と脇を見るハ、^ハあて仕舞也。それより前に、客僧の「ひらに一夜とかさねて御申候へ」と云を、つくぐとまもり居て、扱つれにむかひて「月の夜かげに見奉れば世をすて人」と云ハよし。其外なをふかき習の見やうあり。よく傳受すべき事也。或ハ^ハ天鼓に「打ならず其聲の、ろすひの波ハたうく」と鼓をうつは、^ハあて仕舞也。それより前に「おなじく打也天の鼓」と打て、其あとにて、「打ならずその聲の」といわせたるこそよろし。或ハ^ハ羽

衣に「あしたか山や、ふじの高根、かすかに成て」とそらを見上るハ、是ゝあて仕舞也。雲井に上る天人なれば、もちろんそらも見へけれ共、それより前にいく度もそらを見る仕舞あれば、此時ハけつく下を見る仕舞本意也。あしたか山もふじのたかねも打過上り、かすかに成たる儀理ふかし。或ハゝ山姥に「ミネにかけり」と上を見て、「谷にひゞき」と下を見ルは、ゝあて仕舞也。「今まで爰に、あるよと見えし」と脇の云分なる文句なれば、「ミネにかけり」と下を見をろし、「谷にひゞき」と上を見る事よし。或ハゝ軒端梅に「さきだつあとか、花のかげに」と引て花を見るハ、太夫のしかた也。「やすらふと見えしまゝに」と云文句は脇の云分也。或ハゝ天鼓に「竜眼に御なミだを、うかべ給ふ」とハ、後漢のミかどのうわさ也。「ありがたき」と云所ハ太夫のしかた也。或ハゝ善知鳥に、「まうじやハなくく見おくりて」となくハわろし。まなこに手をあて、ハ、さらに見おくる事成べからず。それより前に、客僧に立わかれ、僧のおくへ下る事をうらやミて一ツなき、「まうじやハなくく見おくりて」となきたる手をひく内に、はるぐと見やるはよし。或ハゝ鶴に「おそろしやすさましや」と面をきり入はわろし。脇の云分なるゆへに、我身のおそろしかるべき理なし。「いくえに」と見とめて、もちたるさほをすて、「きくハぬえのこゑ、おそろしやすさましや」と、あとにていわせたるハ本意也。或ハゝ當麻の中人には、おひの坂と云大事あり。「のぼりのぼる」と、つえとあしに習ありて、「雲に乗て」とつえをすつ

る也。此つえをすつるにて、雲に乗たる理たつ也。右こうがくのためにあらまし書記^ス。是にて外ハ可^ニ分別^一也。萬の能に中入によく心を付べし。きりの仕舞の入段ハ、一番の終りなれば、謡をのこす理ハなき也。扱入あしハ、左足を引、右足より入物也。是正面をうける理也。右一言弟子不^レ可^レ令^ニ相傳^一者也

天文元^{壬辰}曆

服部三郎

十一月吉日

元廣判

書判の上に朱印
二ツあり

(貼紙)「上巻終」

〔中巻〕

〔巻頭には書名も巻序もなく、末尾の貼紙に「中巻終」とある〕

夫能には、天地の間にありとあらゆる事をのせければ、物により事にしたがひて、太夫たらん者、其理をしらずと云がたき事おほかるべし。よくたしなむべきものなり。

一へ畠山右衛門督義就公、音阿弥に向て宣けるハ、へ仕舞ハかたち有て聲なきがごとし。へ諷は聲のミ有てかたちなし。四大空にきすといへば、理にもとづけバかたちなしと見えたり。此理いかん、とのたまふ。音阿弥申けるハ、是ふかき御ふしん也。有無の二間は我等ごときのさとり申所にあらず。然共、黒白の二ツと申時、くろきを無にたとへ、白きを有にとり申。されば、しろきは諸色の根本とあり。是に依て、有無共に、能ハことごとくなきをあるに立る。然ば、先躰を定て諷にも作り候。易書に躰を以て用を作るがごとし。能にハ、男女の躰なきは只一番も候はず。たとへば、其理にもとづくときとる人間を初て、萬物ミな天地の間の空の物にて候へば、又もとづく時かたちなし。天と地とハ、目前に見えて是かたちあり。然ば、天地の間に生じたる空と見えたり。凡日本記にも「天地未^レ割^レ、陰陽不^レ分^レ時、渾沌^{トシテ}如^{ニシ}鶏子^ノ、溟滓而^{ニシテ}含^レ牙^ヲ」〔訓点は底本による〕^(二五)。是かたちより初りて、後に聲出来たるせうこ。其上能ハ、其ありさま

をかたちによめる故を以て、貴賤得道の理はやし。人の佛をねがふを見るに、ほつしん佛ハ無色無形の物也とは申せ共、經せつばかりにてす、め給ハば、愚痴の者得道しがたし。さるに依て、ゑざう・もくざうを作り、是を拝せしむると見えたり。其上、見ると聞との二ツの理にハ、信^{シテ}耳^ヲ疑^レ目^ヲ者常^ノ幣也〔訓点は底本による〕と申。なに事もき、ぬる事はたがふ物にて候へば、目に見る事を本とせよと、古人のことばにも候と、返答申たりければ、義就公を初申、満座の人々、あゝ申たりとて感ぜられけるとかや。

一 其つてよりことおこりて、種々むりやうのせんさくしたまふに、音阿弥常に吟味して覚えおきたる事なれば、とゞこほる所なく悉く返答せり。後学のためなれば、則書記^ス者也。又義就公のたまはく、^ハ諷とハ言^フ風なれば、げにもさぞあるらん。^ハ笛ハ竹に由なれば、尤理也。^ハ鼓ハ革に支なれば、是も断なり。^ハ太鼓と云も大つゞミと云も、同意なるやうなれ共、大文字に点を打て太鼓の太とよませぬれば、たいこも亦撥を以て点をうつ心あれば、しうくに付ても是も面白し。扱^ハ能とハ何事ぞ。此筆法ふしんとたまふ。音阿弥云ク、^ハ能とハ惣名にて、^ハ能ハ善理也。^ハ能之仕形と申時ハ、仕かたハへんにも人、作りにも士也。此かたちを仕るとかけり。故に、自然にちかき道理を以て、太夫を花のしんにたとへ、役者ハミな其下草也と答。

一 ^ハ脇ハ諷のつかさ也。諷上座して、笛・小鼓・大鼓・太鼓と、次第^{々々}に下座になをるハ、是い

かに。音阿弥申けるハ、自然にちかき理にて候。笛ハ口の役なれば諷の次になをり候。ハ小鼓は肩の役なれば笛の次になをり、ハ大鼓は膝の役なれば小鼓の次になをり、ハ太鼓ハ下におく故を以て下座になをり申也。ハ諷は物のねをもからず、其身其まゝの聲の役なれば、尤上座仕と答。

一ハいづれが習にくろう有て、いづれが理ハふかゝらんぞや。音阿弥答申。藝ハ、へたにハ苦身なし。上手にハいづれにも苦身の功ありて、其理あさからずといへ共、太夫わざ、ハ諷の藝にハ、又くらべてひとしからず。殿上の管^管絃などにハ、さこそふかき理も候べし。能にハ其道理なし。

たとへば、ハ笛ハ五音の呂律を以て吉凶のかはりあれば、其相應をふくと申せ共、双調ハ春の調子にて、萬物の初なれば、祝言也とて、此調子を吉事にもつばら用れ共、双調計の音はいです。

五調子共にくわはりきこゆれば、只位計を申物也。ハ鼓ハ太鼓もかけ聲に、ハ哉阿ハ鷹呼ハ叭阿ハ^{エイ}諷呼の陰陽をわかつといへ共、物毎に阿呼生死之本末のなき物ハなし。陰陽に物をたとゆれば、はづるゝ事ハなく候。只太夫の仕形、ハ諷の音聲・ふしをうくる位をはやすまでにて、さしてふかき理ハなく候。ハ謡は古しへの事をかたり、善悪・吉凶をわけて云。かなしみにハかなしみを付、よろこびにはよろこびをますふしをそへて、是をうたふ故に、其理深甚にて、ミな大人のいましめ也と答。

一ハ物にハ正躰あり。能ハ尤正躰あり。脇を初てハ諷ハ笛ハ小鼓ハ大鼓ハ太鼓などの正躰ハ、何と

心ゆるぞや。音阿弥が云々、脇ハ二相をさとり、〱謡ハ魂魄をしり、〱笛は両音をきハめ、〱大
〱小の鼓〱太鼓ハ、立・聞のかんようとして、古しへより定りたる正躰のある事にて候。まづ、脇
の二相と申ハ、一ツにハ、其人のきりやう・ことがらよきを云。二ツにハ、音聲のほひ・色あ
りてよきを云。此二相をもちたる人ハ、おのづから脇も見事に諷もき、よく、ほまれをとり申。
此正躰のなき人は、脇かたハ無用に候。爰をわきまへ侍る所を、二相をさるとハ申也。又〱謡
に魂魄を知と申ハ、〱謡に二ツのたましひあり。魂ハことば也。魄はひやうし也。生れつきたる
ことばよくして、文字・かな遣ひをよく習、あやまりなきを、魂と云。ことばいやしく、かいへ
いあしくハ、此藝ハ無用に候。扱いづれもと云ながら、〱謡はことにひやうしあしくては、中々
きかれぬ物にて候。〱笛ハ、両音をきわめると申ハ、一ツにハ調子をきハめ、二ツにハねをよく
ふく。是〱笛の正躰也。調子もしらず、ねもちいさく、息づかひかなハぬ人は、まづ此藝ハ無用
也。〱大〱小の鼓〱太こは、たち・き、のかんようとして、立とハか、り・手つきさわやかに、じ
んじやうなるを申也。きくとは^(虫損)□の事也。たとひひやうしハうとく共、か、り見事に、ねのよき
を、上手藝とハ定也。ひやうしき、てもよくなる共、よきねもなく、顔くせ・身くせ・手く
せ・かけごゑたしなまざる藝ハ、正躰のなき藝と申也。

一〱日吉又五郎来て父祐賢に云々、今春新法にハ、太夫の仕舞、謡之文句、其外、脇・つれ・〱笛

へ鼓へ太こ・狂言まで、悉くかへ侍り。古しへの例法ハぞんぜず。まづめづらしくて面白し。其
 上当分さしあたりて、げにもと思ふ事おほし。中にも殊に大きな違ひは、へわき能などに太夫
 とつれとへ立かハるやうすを見るに、つれ太夫のうしろを通時ハ、新法にハ前をとをれり。後の
 へ立かハりに、つれ太夫の前を通にハ、必太夫のうしろを通れり。是ハ太夫舞出たるあとにて、
 つれ通り侍れば、舞も舞よし。ざうさもなし。扱太夫座するにも、右の膝を立侍り。左リハ舞臺
 の上座なれば、左りの膝を折しくハ、礼法尤面白し。又へなく仕舞に、たとへば左りの手にてな
 く時ハ、まづ左りの目よりなミだをとめて、扱右の目へ手をやり侍り。是まづ手にちかき所をさ
 きとするハ面白し。又へ五段のまひを見るに、五度鼓を打切也。五段といへば、此道理も尤きこ
 へ侍る也。へ当家にハへ四段打きり五段と定おかる、事、ふしん敷候也と云。祐賢聞て、新法の
 御へんも人数にて侍らば返答申まじけれ共、我家をしんじ給へば、つぶさに相傳申べし。あなか
 しこ人にかたり給ふべからず。世阿弥「行步中_リ規矩_ニうごけば必法度あり」〔訓点は底本によ
 る〕と、家の書に書おき侍り。誠にふかき習也。或ハへ立、或ハへ座、或ハへ臥、うごかざる間
 ハ、悉くへ真言の秘密妙の印明のなりにて侍る也。へ首を空大とし、へ両の手を風大とし、へ胸
 の間を火大とし、へ腰の間を水大とし、へ両足を地大とす。へ左りを陽にしてへ右を陰に定む。
 此印明の折かゞめる所にあたりて、無盡無量のいハれある事也。太夫とつれとのへ立かハり、そ

れハミな不吉にて候。〜翁より〜脇能までハ祝言をむすぶ事なれば、誠にもつたいなき事共也。其上天陳・地陳・人陳をかねて、「一_ビ左_シ一_ビ右_シ一_ビ向_イ一_ビ背_ク、是則天陳之理」〔訓点は底本による〕、前後左右立居、ミな地陳之理、あまねく文句の仕舞、ことごとく人陳也。されば太夫とつれと立かハる事、太夫を天にかたどりて、つれを六氣に表也。「天_ハ左旋_シ、六氣_ハ右旋_ス」〔訓点は底本による〕とて、まはりちがふ事の根本をあらハす。周易にハ「肩_レフテ陰_ヲ而抱_レク陽_ヲ」〔訓点は底本による〕とあり。およそ礼法にも、「上_ル者_ハ自_レ左_リ、下_ル者_ハ自_レ右_リ」〔訓点は底本による〕と見えたり。禮記にも「容之自_レ左_{ムカフ}卿_ト」〔訓点は底本による〕云々。然バ、つれハ立かハる時、太夫のうしろを通る事、本文にも相應也。又〜左足を立て右足をしくハ、陽をあらハし陰をかくす印明のなりにて侍り。其上上座をあらためば、御陣右に立給へば、是以て礼にかなへり。扱太夫或ハあるき或ハうごく時ハ、事により物により、印明の道理もあり。諸礼・諸樂・文武之道、本意本文にあたる時もあり。是を以て行歩は規矩にあたり、うごく時ハ法度あり。此ゆへに、太夫わざハ、瑜伽三密之得儀也。〜瑜伽とハ、境の相應、行の相應、果之相應、是也。〜三密ハ、身と口と意との三ツの秘事を、我家にハおこなふ大事あり。たとひ理の面白ければとて、かたじけなくも長谷の觀音のをしへさせ給ふさだまりを、いかでか人智としてかゆる事有べき。我流_ガにハさらにもちひ給ふべからず。佛ばつのおそれあり。扱〜なくにたとへば、左りの手にて左りの

目よりなミだをのごへば、右よりの見物のものハ、なく也とハ見えがたし。只すこしうつむきて、はなをのごふところ見ゆれ。又々五段の舞の次第ハ、古来の例ある儀也。当家にハ、折返して右にもちたる扇をば、仕舞の紋にハ惣じて用ひず。然間、五段の時も猶是を段に用ひず。子細ある事にて侍れば、至極之理ハかたりがたし。今春に、此扇を紋に用ひて五段と号せば、二段目過て折返したる扇を持って右へまはり、鼓にむかひ、地がしらの前に扇とりほどく時ハ、何とていま一ツ打きらざるや。打きれば六段也。打きらざれば道理にくらし。当家にハ、一毛のさきほどの事をも、理をすまさずと云事なし。能を見たる上にてハ、又能に似たるなぐさミを作る人も候へかし。無空なる所をあミたて、衆人の見てひが事なき様に、諸道のかゝみになる事を、世阿弥うたひ舞出したるハ、さらにほんにんのわざにあらず。ミな観音の御じげんなれば、甚理はかりがたと語れり。

△序之足之秘傳

一へ序のあしの根元ハ、ひがきの老女相傳として、蘭拍子より出たる也。笛ふき出し、小鼓をはしらかす時あゆミ出し、かしらうつ時其あしをふミスへて、「は」と云かけ聲につれて又かたあしをすり出し、小鼓「ぷつ●ぽ」とうつ堺の間、朱の丸の所にて拍子一ツふミ、則其あしを小鼓のはしらかすにつれて又すり出す也。是をとおとす拍子と号して、家の秘傳にて、弟子に

不_二相傳_一。必可秘_{々々}。

一_レ舞に真行草あり。舞序が、りハ真にて、序のおろしに、能により舞す、むあし舞しりぞくあしのかかりを舞て、扱左右に舞出して、爰にて一ツ位をとりて、物しづかに舞出る也。真の位なれば、角をとり、三角四面と舞べし。

一_レ破が、りの舞ハ、行之位なれば、能により、舞す、む足舞しりぞく足はありて、扱左右計にてかゝる。或ハ、謡之儀理によつて、かた左右にてもかゝる。略之位なるによつて、角もなくまハる也。然間、舞四段過て扇右にとりて後、正面へ出て、ひだりの角とり右へまハる。舞序が、りには又此角なし。舞男舞ハ角とる事よし。

一_レわき能おとこ能などハ、大りやく破が、りなれ共、舞わき能ハ祝言、おとこ能ハ仁儀もつばらとするにより、角をとり、三角四面都合と舞也。物をりやくせまじき儀也。りやくハ慮外にて、殊に祝言にた、ぬ也。然ば、舞破が、りも行之位なれば、略のやうにおもふべし。先あしを舞す、むあしにして舞たつぱいの祝言あり。爰を以、行にても真也。扱舞男舞にハ臥する事あり。一_レ舞の段のとり所、舞樂も舞神樂も舞五段も同前也。舞出しハ、謡の内にまづ右へ一ツまハる。定りは舞ハまはりて舞出す／はたらきかけり行が、りなり

一_レ舞の内に扇つまむ事あり。能毎にある儀にあらず。是ハ古しへ舞男舞、或ハ舞しら拍子と云ひ

し時に、装束にてそくたいたる時にハ、略なればつまむ事なし。白衣の時、一しほり舞ミだしたるけうにじやうじて、けいせいなど舞ける也。其例をとりて、遊女の能に、世阿弥、つまむ扇をせり。何にても、上に打かけて舞能にハ、つまむべからず。ハ遊女の舞に扇左りへとる事なしとハ、五段・三段の舞の内にとる扇の事にはあらず。五段・三段の舞の内ハ、舞ミだるゝとの道理を以て、古しへより左りへとる事を一しほりの賞翫にせり。くせ舞などの中の文句に、遊女ハ左りへとる仕舞なし。是ハ古へハ一さしハ一かなでと所望せられたる時に、遊女の座敷などにて舞ける、其例の本意を以て、遊女の舞に扇左りへとらず。惣じて、古来のなき事ハ、ハ我家に用べからず。又五段の舞おさめハ、打上ると打上ざると、かハリ有事也。

うち上る舞ハ左右にとむるなり／わかの出しはそのまゝとしれ

一ハおもかへりハ、あとに心をのこし、身ハ順にまはるを以て、おもひかへす心なれば、ハおもかへりと云事也。此ころより今春にはハそりかへりと名をかへて、ハひしぐ扇と云也。いか成心にはある。

一ハ草の位は三段之舞也。ハさしより前にある舞ハミな三段と心えべし。五段に舞と云事ハなし。其道理をいかにと云に、此舞古しへハ一かなでハ一さしと舞し時より、謡之中、或ハ終に、一はやし此舞を舞けるゆへに、舞の中の舞なれば、則是をハ舞と云。其昔ハ一さしと所望したるハ、

今のくせ舞のごとし。たとへば、^ゝ鶴亀しほりとて、「ほうらいさんにハちとせふる、ばんせいちしうかさなれり、松のえだにハ鶴すくふ、岩ほの上にハ亀あそぶ」、爰にて三段の舞まふて、扱和歌を上ると云て、舞のこうしやは、それぐの一座の賞翫になる事を、とんさくのやうに謡出したり。いまだしよしんにてならふものハ、^ゝ「波風も、おさまれる代ハ久かたの、そらめづかひなし給ひそ」。此和歌すへながし。或ハ又「ちよにやちよをさざれ石の、いハふ心は万歳楽」とうたひ、三段の舞まふて、「あづまぢの、ち、ぶの山の松の葉の、千代のかげそふく」、是を^ゝみどりしほりと云て、此和歌もすへながし。かくのごとくの例なる故に、くせ舞よりまづさきに舞まふたる例はなし。されば世阿弥初て^ゝ能を作り出したりけるに、むかしの^ゝしほりを其ま、おきて、前と後を作りたしたる能も、是おほくある也。或ハ^ゝもミぢ狩ハ、^ゝしほりはぎと云曲にて、^ゝ「さなきだに人心」と謡出し、其後「人の心ハしら雲の、立わづらへる心かな、く」とうたふて、三段の舞まふて和歌あり。或ハ^ゝ自然居士のくせ舞ハ^ゝ船出の和歌と云。^ゝ花月の曲舞ハ^ゝ千壽の和歌と云。^ゝ吉野静の曲舞ハ^ゝしづかしほりと云。其外、書しるすに不^レ及也。かくのごとくの例有を以て、今の能にさしより前に舞まふハ略之儀なれば、そと^ゝ色える計也。もし舞にする能ハ三段と定る也。

一^ゝ今の五段の舞と云も、古しへの^ゝ三段の舞に、世阿弥折返したる扇を舞そへ、序共に^ゝ五段と

号る事也。此故に〱三段の舞ハ折返したる扇はなし。されば、〱五段ハ真、〱三段ハ草といへ共、
〱三段より〱五段出たり。東坡文集に「真ハ生_レ行_{ヨリ}、行ハ生_レ草_{ヨリ}」〔訓点は底本による〕とあ
れば、本文にかなひたる世阿弥が心中ありがたし。

一〱わき能〱男能の外の破が、りの舞に、初段のまはりにすみなき故に、〱三段の舞ハ草なれば、
是もすみなき定りと心えべし。

一〱破之舞ハ、草之略なれば、〱三段の舞を又略したる道理也。然により、順に一ペンまはり、逆
に一ペンまはりおさむるまでの事也。

一〱色えハ古しへより有事也。すみもなく只一ペン順にまはり、左右してとむるまで也。謡の愛_(間)に
かりそめにそと色えるまでの本意にて、念を入る事なし。此道理なる故に、〱三段の舞の代に略
して〱色える事ハあり。〱色えの所を〱三段の舞にする例ハなし。

一〱かけりと云と〱はたらきと云と、かハる所ハ少也。〱臥する仕舞をはたらきへと云。〱不_レ
臥をかけりと名付。〱働ハ鬼の類にあり。たとひ笛ハ翔をふく共、太夫ハ鬼ならば働にまふべし。
角もとり、謡之文句相應にはたらくべし。まはりハ不_レ定、くるしからず。されば説文曰く、「行
住座臥之四威儀」_{ト云々}。行も帰るも座るも臥するも、ミナ悉く儀の理有て、〱時に相應〱物に相
應〱人に相應をすと見えたり。不_レ定事本意なれば、左右に留る事必あしし。

はたらきはよの常人のことばにも／立居しげきをはたらくといふ

一「かけりハ多分「しゆらの類ひ、狂女の能によく有也。すミとり一ぺん順にまはり、又逆に一返しまはり、あし拍子ふむもあり。其ま、ふまざるもあり。其能の位によるべし。臥する事も左右もなし。其ま、廻とめて、うたふ文句をあひしらふ迄の事也。たとへば柏崎・三井寺に「子の行末をもしろいと、ミだれ心やくるふらん」と云てくるひ出るをはやすハ「かけり也。或ハ忠則に「木の下かけを宿とせば」と云、又ハ八嶋に「やさけびのおとしんどうせり」と云てはやし出るハ、ミな「かけり也。たとへば是界に、「初ハ翔リ、後ハ「働と知べし。「初ハ雲に乘じ居て、僧上(正)のすきまをねらひ、けころさんのおもひ入也。「後ハ又法力に身をふせられて、明王のせめをうくる仕舞なれば、是「働也。但初ハゆふに見えて物づよし。後ハあらしやうにて物よハし。かやうの心もちを以て萬事可三分別「者也。

かけりとは物を略するあひしらひ／もんにあふハ猶よしとする

右當家為「極意」堅可「秘者也

天文元壬辰曆

服部三郎

十一月吉日

元廣判

書判之上に朱印
二ツあり

(貼紙)「中巻終」

〔下卷〕

〔卷頭には書名も巻序もなく、奥書末の貼紙に「下巻終」とある〕

夫能は歳相應あり。〱十五・六さい、或ハそれよりいまだいとけなき人は、何の苦身もなく、只うつくしくさハやかに舞なして、手の高き事よし。文句に心付過て、しほらしくかしこき舞ハ、見るめはづかしき物也。〱十七・八のとしまでハ、ふり袖なれば、面もかけず、聲もかハリ、身なりもつきなくなる物なれば、只をし立の位ばかりにて、こまかなる仕舞ハあしし。能のかつかうに事過て思ひ入ふかく、扇のしなよくして、功の入たる人は、へた也。面をかけ、袖をもふさぎ、〱廿時分より〱廿四・五までにハ、聲も定り身なりもなをりて、五常をもわきまへる人の、文句・さはうもかんがへず、〱十躰をもしらずして、大手をひろげはしりまハるハ、あらき能には見ゆれ。大きな共、さハやか成共、たつしやなり共云がたし。只不調法なる仕手と云。〱三十四・五の歳に至りては、大事の心えあり。此時分に上手といわれざれば、一代へたと心えべし。但又、身もかなひ、秘事も大事も傳受して、心ひろく、たけたるまゝに、至過たる身しほをして、狂言になる物也。「大過不及」とハ是成べし。〱四十四・五の歳よりハ、心は至り、仕形は甲斐なくなる物にるて有間、わかき内に情を入べし。

一〽文句・さはうなればとて、せハしく心を付べからず。儀理ふかくふくミおさめ、ちうでうの功をかくし、くわう大なる氣をのむで、不退不働に心をおちつけ、一句一文を一ツ二ツかんがへとりて、其仕舞を殊に面白く舞なして、扱あとゆふに、けしき心ひろくしまふ事かんよう也。「一静可^三以^テ制^二百動^一」〔訓点は底本による〕との理は是也。

一〽東坡文集^ニ曰^ク、「真^ハ如^レ立^ガ、行^ハ如^レ行^ガ、草^ハ如^レ走^{ルガ}、未^レ有^下未^{シテ}能立能行^一而能走^上ルモノ^ハ也」〔訓点は底本による〕。されば、真の定りたるおしたての位もあしく、大圖の能もいたらずして、我藝のほどをもわきまへず、めづら敷舞なさんとこびたる仕舞ハ、かたはらいたし。目つき・顔つき・扇さきにて種々の功を入たるも、手くゞつふうとて嫌也。

一〽かんじんなる文句と云ハ、髓脳記下巻に見えたる〽躰〽用之習とあるハ、文句の内の〽躰〽用也。爰に又しるす所ハ、能一番の〽躰〽用也。たとへば、千壽の謡をこまかによくかんがへ見べし。重衡と問答の所までハことなる事なし。〽「おもへたゞ、世はうつせミのから衣」と、同音になるよりも、悉く重衡のうき身の上の事を云て、千壽がうわさ少もなし。それより奥、〽くりになり、〽さしに成、〽曲舞のはつるまでも、ミな重衡のありさま也。きりに成て、〽「あさまにや成なん、くくと、しゆゑんをやめ給ふ、御心の内ぞいたハしき」と云所より、やうく〽所々に千壽が云分あり。此故に、爰よりも〽男博士〽女博士の習ある也。扱千壽一番のかんじんの

「躰ハ、〜」くも手に物を思へとハ、かけぬ情の中々に、なるるや恨なるらん」と、重衡を見て思ひ入、なく仕舞、この能の根本也。重衡に頼朝より千壽の前をつけられて、御かいしやくに参りけれ共、露のさゝめごともなく、かけぬ契りに世をすて、〜あまになりたる千壽なれば、ためしすくなき次第とて、此能ハ作れり。かくのごとく、其能の根本をよく分別して、謡之文句のかんじんをよくたゞす物也。〜鼓にもかんじんあり。たとへば宇治頼政に、〜「白波に、さつくと打入て、うきぬしづみぬ渡しけり」とうたふ所ハ、もミたて、はやし、〜「忠綱つハものを下知していハく」と云所を、かけ聲をやめてひかへ、しめて打也。或ハ角田川に〜「今一聲こそきかまほしけれ」と云あたりをせりかけてはやし、子の念佛を母きく所を、かけ聲をやめてひかへ、しめてうつ。其外、詩を吟じ、歌を吟じ、きく類の文句に、ミな心を付る。詩歌を一番の賞翫に立て作りたる能おほし。よく吟味すべきものなり。

一〜当座の花〜つゐの花とて、是両共に上手藝の内に二とをり有事也。〜当座の花とハ、きれひさわやかに、物たつしやに、大きなる藝也。されば、此藝ハ見ものなれば、古来の例もさはうもいらず、まづおし立の藝ぶりよくて、笛・鼓ハなるこそよけれ。太夫わざハ、聲よく、身しほありて、扇のしなのしほらしきこそ面白けれ。

としをへておなじ木ずえに匂へ共／花こそ人にあかれざりけれ

と云歌の心もあれば、尤是も上手也。又つゝつゝの花と云藝ハ、ちとそれよりも見所なくて、笛・鼓ハねもちいさく、太夫ハ小舞に、聲もほそく、かひなく敷もあらざれ共、さはうただしき藝を云。されば能ハ、古しへのありつる人のまねなれば、しな過ては人に似ず。はやし物も、かしまし過てあやあひミだれて、かんもなし。理にそむけば、あハれなる事もさらにあハれとおもハれず。只古しへの其人を今見るやうに見ゆるこそ、其しなぐのおもひやられて、かんるひはもよほすなれ。つゝつゝの花と八月を云なり。

尋来て花にくらせる木の間より／まつとしもなき山のはの月

されば時を得、にほやかにさき出せる花を見ては、面白きと心さんじて、たとへむかたはなき物なれ共、花は七ケ日をへて色もなくしほミはて、次第に浅ましくちりうせる物也。月ハ常住の物なれば、さしてめづらしからざれ共、つくる事なく世界をてらして、其徳無量無盡也。まづ六気は花の父母と云へり。春ハ夜の長閑なるに付て、かすめる月も面白し。夏ハ涼しく夕ばへなる山より出る月を見ては、昼のあつさをわする、心ちし、秋ハもミぢに光りを添て、かたぶく月もあハれ也。冬はくまなきそらにすむ、さよふけがたの月を見ては、物すごく心すミて、又是もゑならず。

一々当家の弥次郎長頼が云く、としよりたる太夫にハ、よしあしなる事あり。此ほど細川高國殿に

て、圓満井八郎ゝ鶺鴒をしけるに、六十ゆうよの者なれば、謡のこわいろ面に似合て、ゝ「けふ
この事をこそ心え候べけれ」とおがミたる手つき、ゆびかさならず、少内へかゝみたれば、ま
ことにいやしくとしよりて見え、其手をそのまゝ目にあてゝ、ゝ「さけべど聲の出ばこそ」とな
きたるふぜい、扱も出来たり。其あとにゝ夕顔しけり。まく上て出ざまに、上を一目、下を一目、
又左右を一目見て、橋がゝりをねり出たり。扱、ゝ「山のはに、心もしらで」と謡けるに、聲面
にさうおうせず、うなりたるしハがれ声にて、しかも大音にうたひければ、扱も古しへの源氏ハ
いか成ものずきにてあのやうなる物ごしにまよひうかれ給ふぞやと、おそろしくこそ思ひ侍れ。
其後曲舞になり、ゝ「いかにせんとか思ひがハ」となきたる手つき、しわよりて、ゆびのまたあ
ひひらきつゝ、内へ少かゝみたるを、うつくしき小面の目にをしあてゝなきければ、あひらしげ
もいつかうせて、きたなくこそ見え侍りし、とかたる。ゝ惣じて、女・男によらず、なくゆびは、
ゝ上らうハゆびをそらせてならべそろへ、ゆびさき計を目にあてゝなく事、是習也。ゝ下らうハ
ゆびをそらせず、ならべず、ゆびさき目より上へあげて、ゆびのねもとにてなく物也。ゝ老人は、
なくにもおがむにも、ゆび少かゝめたるがよし。然共、ゆびさきは目にあつる時、ゝ上らうハゆ
びさき、ゝ下らうハゆびのもと也。ゝおがむ手も、ゝ上らうハそろへ、ゝ下らうハまたひろし。
扱まくぎわにて面をきる事ハ、女能にハさらになき事也。およそ女人は人目をはぢて色ふかき事

を表とせり。禮記にも「女子^ハ出^レルトキハ門^ヲ必^ズ擁^ニ蔽^{スト}其^ノ面^ヲ」〔訓点は底本による〕と云へり。よくく十二段のまくを可^ニ傳受^一也。

一 おがむに習しなくあり。女能、或老人の、白衣・水衣などの出立は、手をむねぎわによせ、物ちいさくおがむ也。但上に何にても打かけたる装束の時ハ、ひぢをさげて手さきハよきころにさしのぶる也。おと^(おと)のたぐひの能ハ、ひぢすこし上、手さきはよき位にのぶる。只常の我人おがむ手もとに少たかき物也。鬼能^(おに)しゆらの能の類は、ひぢいからかし、手さきもかつこうよくさしのぶる事よし。いのりわきには、珠数のすりやうあり。手を両共にならべて合もミするハ、蓮華合掌とて後世をねがふいのり也。十のゆびを打ちかへてもミするハ、釈迦合掌とて、空なる所を、ミづから中道実相之さとりをひらき、とくだうしたる祈也。又現世をいのり、神をおがミ、或ハ生れう・死れうを祈ハ、手を十文字に打ちかへていのる事、顕密之法の秘傳也。ふかき傳受も有事なれ共、およそハ叶と云文字の道理也。故にくわんねんにハ、祝言不吉の秘事有て、是を口となへ、手を以て十文字をすれば、則かなふと云理あり。猶よく可^ニ傳受^一者也。

一 おがむをひらき酌などに立よるにハ、男ハ扇をひらき、其ま、持て一ツくミて立よる物也。女ハ扇をひらき、かな目をよこにして、上ほねをゆび三ツにてつまミ立よる事、習也。

一 へ曲舞のかゝりに三ツあをぐ扇あり。是は、いさミたる道理をするなれば、かなしき文句にハあほがず。へしゆらハぐんばいの心なり。へ鬼ハつよミの理也。故にミなあほぐべし。へ狂女の類は一圓あほがず。問答之内も脇にあひしらひなし。只一ツニツ計かんじんの文句にあひしらふ也。一 へきりの入に、へわき能へ鬼むきへしゆらむきへひた面のおとこ能、或ハへかりぎぬきたる能などには、あほぎ遣ふ扇にて入也。へ長けんにもへまひぎぬにもきたる能にハ、男女共に扇をおり返し、舞とめ入。或ハへ水衣、或ハへ白衣の能などにハ折返さず。よく可_二吟味_一者也。

△神樂之事

一 へ夫神樂ハ、天照大神天の岩戸にとどこもらせ給ひ、世界とこやミの夜に成し時、八百万の神たち、岩戸の前にて神歌を初てうたひ舞給ひしより、へ神樂とハ申とかや。へ五へいも則此時より初り、竹の長さ五尺にて、紙ハ七五三と切也。右之道理あるによつて、へ神樂ある能にへいをもたずと云事ハなし。吉田之神主・伊勢之長官・出雲之国祖、右三人に神道之習つぶさに傳受せしに、へ神樂のへい、舞かゝる時に、あほぐ事も、ふる事も、たつばいにする事も、不吉なればさらにせまじき也。紙のかたを左りになし、両の手にてもてる計にて、爰にへしやくながしと云習あり。扱段之内にへいぐしを折返す事も、左りへとり渡して、へいぐしよこにもつ事も、さらに神道にハ無事也。或ハ左りにたてにもち、或ハかたげる事ハあり。よこになすハミな不吉也。此

道理あるにより、^ハ序ハあしにて合、^ハ二段めハ常のごとくかざし、^ハ三段めハかたげ、其後す
 てて舞にする也。神事・法事・諸祝言には、^ハ神道の^ハかぐらと云事あり。又^ハしらばやしと云
 事もあり。其時、^ハ序ハ常のごとし。^ハ二段にかざし、^ハ三段にかたげ、爰にて^ハ三面の習あり。
 太こに^ハ三ツがしらを打也。^ハ四段ハ^ハ祭礼の事あり。つぶさには書しるしがたし。^ハすり拍子
 と云事をふむ所あり。太こ・鼓にも、^ハそ、り拍子と云事を打也。惣じて三輪の^ハ「八百万の神
 たち、岩との前にて是をなげき」と謡時に、膝を立るハあしし。へたととゞして、両の足のうら
 を合、ろくに居事習也。古しへの^ハ神楽にハ、^ハみこの舞とて、^ハ神楽に似たる事をふけり。世
 阿弥より此かた今のかぐらの笛になれり。此故に、^ハ神道ある時ハ、^ハすり拍子の間をば、^ハみ
 この舞の手を吹て、^ハどひやうしを入る也。^ハ神楽ハ、不^レ相^ハ不^レ違^ハ乗^リ不^レ乗〔訓点は底本に
 よる〕、程之拍子と号也。

一^ハ八乙女の舞けるに、まさきのかづらとて、山かづらを以てひたいをゆふて舞ける也。これ神事
 をうやまふ儀也。まさきのかづらは
 長クあてたる物とぞ。

わぎもこがはなしの山の山人と／人も見るべく山かづらせよ

と、もしほ草に見えたり。「わぎもこが」とハ、女の事なるべし。此道理有によりて、今の女能
 にハ^ハかづらおびをかくる。一ツハお、ひかづらのか^ミみ^ミれ^まじ^きとの徳也。^ハ神楽ハ舞の初

りにて、今の能も出来ぬれば、其初をただす所。尤^レかづら帯をかけるハ、是能の根本なり。よく^レ神楽を可^レ傳受^一者也。

△鞆鼓之事

一^レかつこの打やう、さのミ定りハあらね共、^レ初段順にまハる時、かたばち計にて打てまハリ、鼓の前へかへる時に、両ばちにて打て、又^レ二段に逆にまハる時も、かたばち計にて打てまハリ、鼓の前へかへる時に、両ばちにて打て行。^レ三段真中へ打て出る時に、両ばちにて打事よし。おなじやうにせまじきとの理也。次に打てならしやうハ、いかやうにてもくるしからず。合事をよきとす。足拍子も、かつこにかぎらず。^レ蘭拍子の外ハ定りなし。何とふミても不^レ苦。謡の文句、笛・鼓・太こに相應するをよろしとせり。はやし物にちがふもあしし。きたなくあたり合もあしし。数のおほきもかましし。おとの高きも猶いやしし。世阿弥此位を歌に、

あし拍子ちがはずあはずのりのらず／句あひをふんであたらぬぞよき

^レかつこ八桴と云時ハ、打手を八もんじにかまへて打事成べしとのせつあり。必其理にあらず。只おほくうつと云所を、やつとハ云儀也。^レ八重むぐらと云、^レ八橋といへ共、はしを八ツかけたるとおもふハあしし。おほき所を云とかや。

一^レおなじかつこの打やうにも、^レ難波^レ梅香枝・富士太鼓、かやうの類ハ習あり。

梅がえだにこそ鶯ハすほくへ風ふかばいかにせん花にやどるうぐひす
如レ此に打事也。伶人之舞の太こ、如此之拍子にて、此ばちの間々に、三ツづ、うつ心拍子あり。
其拍子をでうぎにして、ハ樂に打合也。ハかつこにかぎらず、萬うつ物、萬の仕舞にも、其ミ
ちくくの人にとふべし。

一ハよろづ作り物をおく事ハ、定たしかならねば、おしゆるにも習にもたよりなき故を以て、たと
へば、松風の車、猩々の壺、三井寺のしゆるうなどハ、見付のはしらより二尺五寸間をへだて、
すミかけておく物也と、弟子にはおしゆれ共、貴人御見物の御かたにより、仕舞の分別かハる事
なれば、仕舞をすべき様子によりて、おき所いづくにても少もくるしからぬ也。ハ船も、ハ出船
ハ入船と云て、脇の座所を陸にとり、ハわき正面の方を海・河に定む。然間、ハ船のへの右へよ
るハ出船也。ハ左へよるハ入船也。其外おき所ハ定りなし。

△樂之事

一ハがくにハ序の有と序のなきとあり。ハ序あるにハあひしらひあり。ハ序のなきには、たつぱい
にてかゝる。乗ル位にて三角四面を本意とせり。あとの拍子にて乗舞事、古しへの例也。笛・鼓
にあたる拍子をきらふ。笛のりよの時ふミ乗て、かんの時は舞行也。
一ハはや笛にハ定りなし。能之位・謡之位に相應なるをよろしとす。

一 へ相應にさまぐあり。へ鼓の破にて太この急あり。へ謡之序にて鼓の破もあり。へ序にてうたひ、鼓・太この急にはやす事もあり。へ破にて謡て急へ渡す位もあり。へ謡は急、へ鼓ハ破にて行能も是おほし。是をへ闌悶蘭拍子と号す。一往におもふべからず。

一 へ順は逆也、逆ハ順也とて、常之法ハ右へまハるを順とし、左りへまハるを逆と云。能にハ是を引かへて、左りへまハるを順とし、右へまハるを逆とす。此順逆より能はじまる也。よく口傳を受べし。

一 へさゆうとハひだり右なれば、則左右と書也。へたいはいとは、ひだり・右、前・うしろとあゆむを以て、對俳と書て、つがひた、ずむとの理也。又へたつぱいとハ、達拝と書て、おがミたつすると云文字を表す。

扇之名所

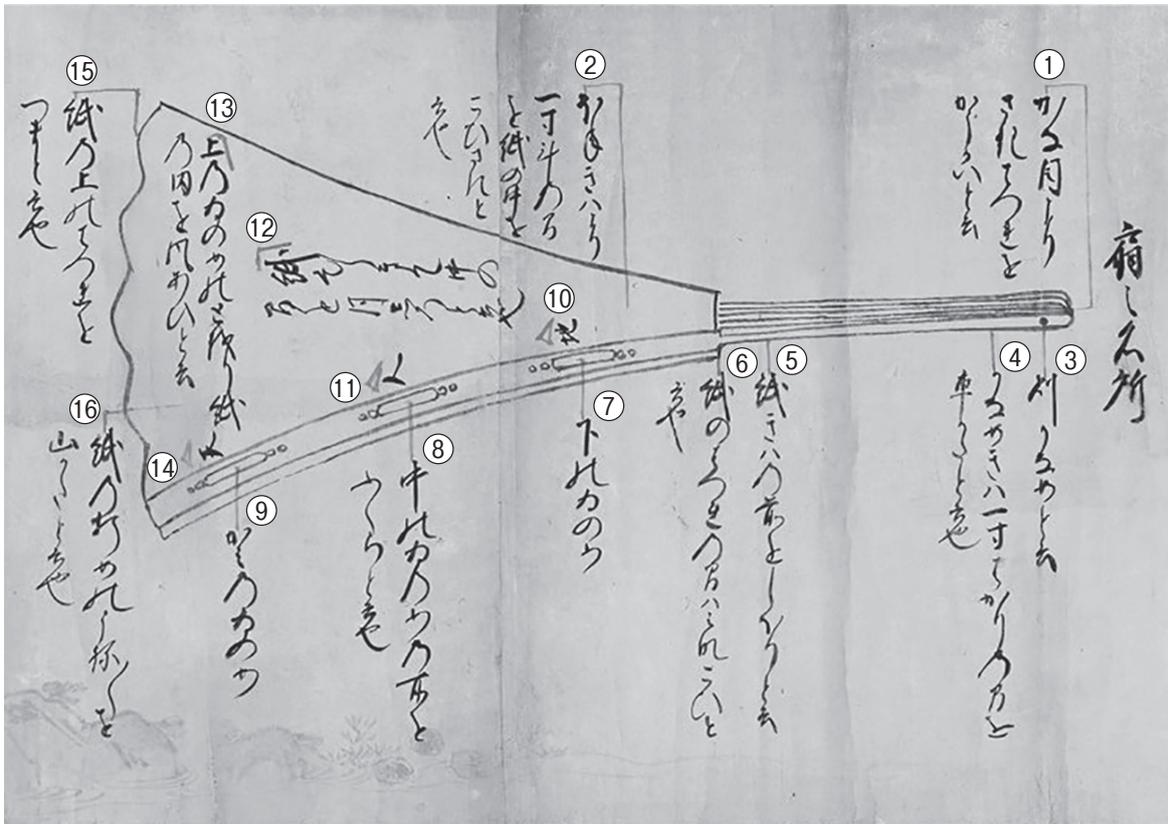
① かな目より
さきはづれを
かうがいと云。

② ほねぎハより
一寸計の間
を紙の中を
こひさきと
云也。

⑫ 紙ひらきて中の
間を月しろと云也。

⑬ 上のゐのめのとをり紙
の内を風あひと云。

⑮ 紙の上のはづれを
つまと云也。



③ 則かなめと云。
④ かなめぎハ一寸ばかりの間を
車がたと云也。

⑤ 紙ぎハの前をしぼりと云。
⑥ 紙のはづれの間ハミなこひと
云也。

⑦ 下のゐのめ
⑩ △地

⑧ 中のゐのめのを
ふくらと云也。

⑪ △人
⑨ かみのゐのめ

⑭ △天
⑮ 紙の上のはづれを
⑯ 紙の折めのうねくを
山がたと云也。

一へ此舞扇の名所ハあり共、常にさたすべからず。家の極位のこらず傳受して、其上にての能のゆるしに、ひそかに是を傳べき物也。

一へ左右とハさつくくにて、極樂の樂の字也。されば樂の字の筆法は、中にまふすと云字ありて、次に左りへ筆をたて、引、扱右へ筆を立て引、ひら木にてかきとむれば、一人の中に引筆あり、下・上に通ずる字なれば、上之筆法ハ両の手にて、ひら木ハあしと知べし。猶口傳。

右之條々ハ、近年今春於新流^ラ立^テ、背^キ我^ガ家^ヲ、依^レ有^ルニ非道之仕舞^一、則末世^ニ當家ノ爲^ニ明鑑之^一、悉^ク古来之理例^ヲ集而、上中下三卷^ニ記^レ之^ヲ畢^{ンヌ}。永代觀世家ノ極位^ト号^シ、孫子一子之外聊^カ不^レ可^レ令^ニ相傳^一者也〔訓点は底本による〕。

天文元^{壬辰}曆

十一月吉日

服部三郎

元廣判

書判の上に朱印
二ツあり

(貼紙)「下卷終」